分科会B：座長所見

川　口　　章（同志社大学）

ワークショップBでは，映画を使ってオーストラリアの文化や社会について教える方法を2人の講師から紹介していただいた．ダリアン＝スミス氏は，アボリジニーと白人の関係をテーマにした映画を2本，アレクサンダー氏は，イタリア移民3世の少女の生活を描いた映画を取り上げた．

映画を利用することのメリットは，視覚と聴覚の両方を使って理解ができること，ストーリーのみならずその背景にある風景や何気ない会話からもオーストラリア社会を学ぶことができること，そして文字を読むより楽しいことなどたくさんある．うまく使いこなせば非常に効果のある教育が期待できる．会場からは，実践的な質問が多く出た．

まず，何を基準に映画を選ぶか，という問題がある．一言で言えば，「オーストラリアらしい」映画である．アボリジニーをテーマにした映画や多民族社会を描いた映画は無条件でこれに当てはまる．ホラーやコメディーは，適切でないものが多い．ダリアン＝スミス氏は，どちらかと言えばストーリーを重視するのに対し，アレクサンダー氏は，ストーリーよりも映画の背景にある「オーストラリアらしさ」を重視する．会話や人間関係，風景などに見られるオーストラリアらしさである．

次に，映画を見て何を議論するかである．登場人物の心の動きや人間関係について議論するのが一般的な授業方法であるが，オーストラリアを学ぶという目的からすると違った方法があってよい．映画の中の男女の会話や親子の会話，友達関係や近所の人との関係などが，日本とどのように違うか，といったことをテーマにディスカッションさせるのである．これは，教員の知識や技能が最も問われるところである．何気ない会話にも，歴史・文化・政治・経済など複雑な背景がある．それは，オーストラリア人ならば当り前過ぎて気づかないかもしれないが，逆に日本人なら，それらの背景が分からないために表面的な理解しかできない恐れがある．教員自身が十分な準備をしておく必要がある．

また，映画をすべて見せるのか，それとも一部だけ見せるのかという問題がある．授業時間は高校で50分，大学で90分だから，授業中にすべてを見せることは不可能である．しかし，一部だけ見せたのではその場面についての十分な理解ができないだろう．あらかじめ授業の前に見せておくのが理想であるが，生徒や学生が十分な関心を持っていることが前提となる．

最後に，二つ希望を述べておきたい．一つは，ダリアン＝スミス氏とアレクサンダー氏に，映画を使ったオーストラリア社会についての授業の雛形を作っていただきたいということである．ストーリーについての解説，会話の文化的・歴史的背景の解説（特にジョークは外国人

に理解しがたいものが多い)，どの場面で何をテーマにしたディスカッションを行うかといったディスカッションのテーマ例などがあれば，授業に利用しやすい．また，映画には日本語の字幕が不可欠であるが，これは豪日交流基金とオーストラリア大使館にお願いすべきだろう．

もう一つは，次回の Teach Australia の会合では，日本でオーストラリアについて授業をしている日本人の先生方に，その体験を語っていただいてはどうかということである．大学ではオーストラリアに関する講義を行っているところが徐々に増えているし，高校や中学でも通常の授業や修学旅行の準備としてオーストラリアを教えているところは多いはずである．このような学校の先生方に，授業でされている工夫や教える上での苦労などを報告してもらい，意見を交換し合うワークショップを開催してはどうだろうか．